

Title	anaphore概念に関する一考察
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	フランス語学研究. 1993, 27, p. 61-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57754
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

紹介

anaphore 概念に関する一考察

井元秀剛

0. はじめに

anaphore は一般に「照応」と訳され、フランス語学のみならず一般言語学上の基本概念であり、それに関する議論も多い。だが、この用語は用いる学者の立場や扱っている問題の種類に応じて様々な意味で使われており、定義に関してあいまいな部分も多い。特に deixis と対比して用いられる anaphore は、その概念規定をめぐって未だ議論が続いている状態である。1990年に Sorbonne で行われた colloque の報告が、今年(1992年)、*La deixis* のタイトルのもとに出版されたが、この中に ZRIBI-HERTZ と KLEIBER が anaphore と deixis の差異を如何に規定するかという論考をよせているので、これを機会にこの用語の多義性を整理し、会員諸氏の注意を仰ぐとともに、この問題に関する私見を述べてみたい。

1. anaphore の多義性

一般に anaphore と称される言語現象には次の4つの概念規定がある。

- ① 生成文法において、pronominal, R-expression に対置される概念として。
- ② 受け直しを典型とする2つの言語記号間の関係を表す現象の総称として。
- ③ cataphore に対置される概念として。
- ④ deixis に対置される概念として。

① に関しては改めて述べるまでもあるまい。himself, each other といった英語の代名詞に代表される表現で、一定の束縛範疇のなかで束縛されなければならないもの、という厳密な定義が与えられており、② 以下とは混同を許さない同音異義語と言ってもよいであろう。事実英語では①を anaphor, ②以下を anaphora と言ひ、これらは別語である。仏語にあっては、これらには同一の語 anaphore が使われるために、初学者の間で混乱を引き起こすことがある。ZRIBI-HERTZ はこの混同を回避するため①を pronom A と呼んでいる。

② 以下は基本的には同一の概念であり、広義にとらえるか狭義にとらえるかの差でしかない。前に出てきた名詞を受け直す代名詞、英語の he や仏語の il がプロトタイプである。

- (1) Paul et Marie ont eu un enfant hier. Il se porte bien.

(2) Paul et Marie ont eu un enfant hier. L'enfant se porte bien.

(3) Il y a eu un accouchement hier. L'enfant se porte bien.

(4) Paul et Marie ont eu un enfant hier. Cet enfant se porte bien.

(2) の l'enfant が文中で果たしている役割は (1) の il と同じであり、同一の範疇で処理することに何ら異論はないであろう。ともに前に出てきた名詞 un enfant を受けているのである。この同一指示 (coréférence) は anaphore の典型であるが、これによって anaphore を定義しようとするれば、(3) の l'enfant の用法がここから排除されてしまうことになる。だが、l'enfant という定冠詞つきの名詞 le N に着目するなら、(2) (3) における l'enfant の指示内容は同じで、これらもまた、(1) (2) のプロトタイプに準ずる共通の文法範疇として与えることが望ましい。この (3) を考慮に入れて anaphore を定義したものとして CORBLIN (1983) をあげておく。

(5) «L'anaphore consiste non à répéter quelque donnée du texte antérieur, mais à situer nécessairement l'interprétation de tout nouveau SN d'un texte relativement à la mémoire des interprétations antérieures.» (p. 120)

これを上記 ③ の anaphore の定義とすることができよう。CORBLIN (1983) の眼目は le N と ce N の違いをこれらの名詞句の本質的な機能を探って明らかにすることであり、これらに共通する現象を表現する文法範疇が必要だったのである。この定義によれば (4) の cet enfant もこの範疇に含まれる。現象上 (2) の l'enfant と同じ役割をはたしているからである。CORBLIN 自身は LE による照応を anaphore définie, ce による照応を anaphore démonstrative と呼んでいる。

名詞句を問題にする限り、先行詞は常に前方に生じるが、代名詞の場合は後方に生じることもある。

(6) Quand il rencontre Marie, Paul est très content.

このように後出の名詞と関係づけられる代名詞の用法を特に cataphore 「後方照応」と呼び、anaphore と対置されることがある。そのような場合日本語でも「後方照応」の訳語が anaphore について用いられる。だが、cataphore との対比が問題になる場合を除けば¹⁾この対立は中和されるのが普通で、「後方照応」もふくめた「照応」の意味で anaphore が使われることの方がむしろ多い²⁾。特に ④ の観点にたつ場合、問題になるのは代名詞 il に代表される指示のしくみと、ce や ce N のような指示語が果たすしくみの差であり、(6) の il の用法を特に (1) の用法と区別して排除しなければならぬ積極的な理由はない。(6) も (1) に準じて処理し、déictique な用法と対置させるのである。実際このような観点にたつ、Larousse の *Dictionnaire de linguistique* では形容詞 anaphorique の定義に «se réfère à un syntagme nominal antérieur ou à un syntagme nominal qui suit» (下線筆者) と述べ cataphorique な代名詞の用例をあげている。したがって (5) に cataphore を加えたもの

が②の最広義 anaphore であり、ここでは「テキスト上に現れた二つの表現 A, B があって、A の内容を考慮にいれることが B の指示対象の特定に不可欠である場合、B の A に対する関係を anaphore と言う。このとき A, B の順序は問わない」と定義しておこう。ここから deixis を除いた④が狭義 anaphore である。次節以降ではこの④の観点にたつ anaphore を問題にする。なお日本語の「照応」は最広義 anaphore の訳語として用いられ、狭義 anaphore には用いられない。

2. deixis と対比される anaphore

現在は anaphore が deixis との関係で問題になることが多い。特に代名詞の用法等をめぐってその形容詞形である anaphorique が déictique と対置される³⁾。

仏語における三人称の指示語の体系を通覧すると、L を形態素にもつグループ (il, elle, le, le N...) と C を形態素にもつグループ (ceci, cela, ce, ça, celui-ci, ce N...) とに大別され、双方のグループの指示対象認定のしくみが本質的に異なっているのではないかと直観的に予想される。しかも素朴な直観から単純化すれば、英語の he や it は前者の、this や that は後者の、日本語の「こ、そ、あ」はその多くを後者のしくみに依存しているように思われ⁴⁾、この二つのしくみを厳密に規定し分けることは、一般言語学的に見ても非常に意味のあることなのである。今仮に前者を L 系指示、後者を C 系指示と名付ければ、L 系指示が anaphorique、C 系指示が déictique であるとして一般論を展開していきたい、という論理的要請があるのである。

しかしそのように想定される外延に内包的定義を与えること——それはとりもなおさず、これらの指示の機能を追求することに他ならないのだが——は、容易な事ではない。最も古典的な定義は、指示対象をテキストの上に言語化されたものに求めるか、発話状況に現存するものに求めるかによって区別する。代表的なものとして次の ZRIBI-HERTZ の定義をあげておこう。

(7) Je définirai au départ la deixis et l'anaphore comme deux procédés d'assignation de la référence : la deixis met en relation le discours et la situation d'énonciation, donc l'univers des objets ; tandis que l'anaphore est une relation entre deux expressions linguistiques au sein du discours. (p. 603)

これは④の観点で anaphore を論ずる者の共通の認識であろうと思われる。邦訳でも指示について anaphorique に「文脈指示」、déictique もしくは démonstratif に「現場指示」をあてる事がある。anaphorique のプロトタイプとして L 系語 il の(1)の用法、déictique のプロトタイプとして C 系語が使われた次例のようなものが想定されよう。

(8) Regarde cet homme-là. (指差しの身振りをともなって)

しかし、現場とテキストは相即不離の関係にあって、いかなる発話状況も言語テキストとして認知されうるし、いかなるテキストもそれを認知する過程で発話状況が想定しうるのである。従って現場指示の C 系語がテキスト指示に、テキスト指示の L 系語が現場指示に転用されることが頻繁におこる。前者の転用の例として (4) を、後者の例として (9) をあげておく。

- (9) Attention! Ne t'approche pas! *Il est dangereux.* (emploi de *il* sans antécédent, prononcé par le père dans la situation où le fils s'approche trop près d'un chien.) (KLEIBER, 1992, p. 616)

(7) の定義を単純に適用すれば⁵⁾ (4) は anaphorique, (9) は déictique な用法ということになる。ところがこれでは L 系指示=anaphorique, C 系指示=déictique の図式が崩れてしまう。そこでこの図式そのものを放棄してしまうか、(7) の定義を変えてこの図式を守るかという選択を強いられることになる。ZRIBI-HERTZ は前者の立場を、KLEIBER は後者の立場を取っている。

2.1. ZRIBI-HERTZ (1992)

ZRIBI-HERTZ は多くの言語で déictique な表現が anaphorique な表現に発達していった歴史を持つという事実を確認し、déictique 性と anaphorique 性は相補的な関係にあって、同一表現内で共存しうる特性なのではないか、という仮定から出発する。彼女によれば、あらゆる指示表現は特別な例外(仏語における非強勢再帰代名詞 *se*)を除いてこの二つの性格をあわせもち、anaphorique 性が強ければ déictique 性は弱く、déictique 性が強ければ anaphorique 性は弱い。(7) の定義から出発し、指示対象の決定にあたって語用論的な要素(つまり発話状況)が介在する度合いを déictique 性の度合いと見、統語論的制約の強さ(これが強ければ強い程語用論的要素が介在する余地は低くなる)を anaphorique 性の度合いと見る。そして個々の指示表現の持つ文法的な制約をチェックし、それらを déictique から anaphorique にいたるスケールの上に並べていくのである。例えば「文中要素に束縛を受けやすいものほど、文内文法に依存する度合いが高くなるので anaphorique 性が強い」ということになる。この基準で、*il*, *celui-ci*, *celui-là* を見てみると、

- (10) a. *Pierre* pense qu(e) (*il*/**celui-ci*/**celui-là*) est malade.
b. *Marie* a prévenu *Pierre* qu(e) (*il*/*celui-ci*/**celui-là*) avait raté son bac. (ZRIBI-HERTZ (1992) p. 609)

a. の環境のもとでは *il* のみが可、b. では *il* と *celui-ci* が可で、*celui-là* はこのいずれの場合も不可であるから、*il*, *celui-ci*, *celui-là* の順に anaphorique 度は高く、déictique 度は低いということになる。これは定義の一つの仕方であって、それはそれでよしとしなければならないが、前述の L 系語と C 系語で指示の仕組みが全く異なっているという立場からみると不満が残る。この後者の立場にたつと、*il*, *celui-ci*, *celui-là* という三つの表現は境界不分明なスケールの上に均等に乘って

いるようなものではなく、il と他の二つの間には本質的な違いがあって、その違いをこそ明らかにすべき問題だからである。この立場にたつのが KLEIBER (1992) である。

2.2. KLEIBER (1992)

KLEIBER はこの問題に関して決定的な定義を自ら下すのではなく、二つのアプローチが存在することを示し、その長所と短所を検討し、結論を今後の研究に委ねる形を取っている。第一のアプローチは古典的な (7) の定義に基づくもので、ここから (4) の *cet enfant* を *ce N* の *emploi anaphorique*, (9) の *il* を *il* の *emploi déictique* とするが、その一方で (4) と (8) の *ce N*, (1) と (9) の *il* の機能はそれぞれ同一であるという直感を捨てない。そこで *ce N* は *sens déictique* を、*il* は *sens anaphorique* を持つ、として *sens* としての *anaphore* と *deixis* を規定しようとする。ここで取り上げるのが第二のアプローチで「すでに *saillant* な(認知的に突出している)要素を受けるのが *anaphore* で、その使用によって対象を *saillant* にするものが *deixis* である」と定義するのである。この定義の最大の利点は (9) の *IL* を *anaphore* に取り込めることである。(この現場で問題の犬は認知的に突出している。) (4) についても、これが *anaphore* か *deixis* かを決めるのは容易ではないが、*cet enfant* が先行詞を *saillant* にしているのだ、と言えば、一応の形式的妥当性は保たれよう。問題は KLEIBER 自身も指摘しているが、*cataphore* で、(6) の *il* はこの時点ですでに *saillant* であるとは言えず、この用法を除外しなければならない。とすると *il* の *lexical* な特性として *sens anaphorique* を認めることはできなくなる。

3. 定義試案

以上のことをふまえ、問題意識として KLEIBER と共通の立場に立つ筆者は、次のように *anaphore* と *deixis* を定義したい。

- (11) 言語が構築するスペースの中に存在する *saillant* な要素を、言語的概念化を経た意味的特性にのみ基づいて特定する指示を *anaphore* と呼び、話者の視点が位置する基準点からの、認知的な距離の指標に基づいて対象を特定する指示を *déictique* と呼ぶ。

広義照応はこのどちらかの仕組みによってなされ、これ以外の仕組みは存在しない。この意味で *anaphore* と *deixis* とは相補的である。(11) が (9) を解決することは KLEIBER の場合と同じである。さらに加えて、(9) の場合、目的の指示対象が言語的概念化を経ていることが明らかである。*il* の持つ「男性」「単数」の特性は、この対象が *un chien* という男性単数名詞で捕えられることによって初めて可能になる把握のしかただからである⁶⁾。次に (6) については、*quand* がスペース導入詞で先行の文脈に依存せず新スペースを導入する時、この時点で *saillant* な要素はこの

スペース内に存在しないので、対象は特定できず、Paul の出現を待って saillance が満たされ、il が Paul を特定する、と考えれば (11) に違反しない。さらに (6) の il が Paul 以外のものを指す場合も (11) は説明する。この時 quand で導入されるスペースが前文脈を親スペースとしてもつため、そこから引き継ぐ saillant な要素が特定されるのである。

一方文章の中に現れる deixis は、(4) で cet enfant を il に代えることが可能なように、大概是 anaphorique な代名詞で代替可能である。とすれば、(4) は cet enfant の使用でこの対象が saillant になったと言うより、それを使用する時点で対象は既に saillant であったと考えるべきであろうと思われる。従って KLEIBER の第二のアプローチを採用する積極的な理由はなく、(4) の cet enfant が déictique であるのは、(11) が規定するように、その指示が、発話行為を行っている話者の位置に依拠しているためである、と筆者は考える。井元(1989)で示したように、ce N は発話の現場である発話状況に現存する対象を指示する。遠近の対立のない仏語の ce, ce N の場合、「話者の視点が位置する基準点からの認知的な距離の指標」は「発話状況の現存」と言う条件に集約される。

(11) の難点は、文章に現れた deixis の場合、「発話状況」が抽象的、理論的なレベルでしか成立しえず、それを証拠だてることが難しい、というところにあるように思う。詳しくは別稿に譲るが⁷⁾、仏語の ce, ce N が (11) によって déictique とされることの間接的な根拠として次の二点をあげておく。① 井元(1991)で示したように、il が先行詞から形態的、意味的特徴を引き継ぐのに対し、ce にそのような性質はなく、anaphorique な指示を行えないから、発話状況の現存によって指示をおこなっている、と考えざるを得ない。② 発話状況に第一義的に現存するのは言語記号であり、記号内容ではないから、言及を受けてないものは文章に現れた deixis の指示対象とは成りえない。ce N は正にそのような性格を持つ。

(12) On lui confisqua sa maison. Ce cadeau de l'oncle Ernest... (CORBLIN, 1983)

(12) で意味的に関連が少ない二つの名詞句の間で照応が成立するのは、言及されたものの中にのみ対象を求める ce の déictique な性格によるのであって、意味的特性に基づいて照応を行う anaphorique な le N では、この照応は成立しないのである。
(東京大学博士課程)

[注]

1) cataphore については KESIK (1989) にまとまった研究がある。

2) MAILLARD (1974) は anaphore と cataphore を総称して diaphore の用語を用いているが、この語はまだ一般化していない。

3) 時に anaphorique の対概念として démonstratif が用いられることがある。「現場で指示動作をともなって用いられる語(の)」と言う意味である。deixis は démonstratif の上位語で、話手との関係で指示対象が決定されるあらゆる語をさし、話手が発話行為を行っている場所を参照しな

ければ、指示内容が定まらない場所の *deixis* 以外に、人称の *deixis* (*je, tu* など)、時間の *deixis* (*aujourd'hui* など) 等をも含めた総称である。 *démonstratif* はおおむね場所の *deixis* に相当する。実際、 *anaphore* との対比で使われる *deixis* は場所の *deixis* だけであり、本稿で問題にしているのもこの場所の *deixis* である。

4) もちろん、日本語の「こ、そ、あ」が仏語の C 系語と単純に対応するわけではない。日、仏の *deixis* 表現の比較について

は、井元(印刷中)を参照されたい。

5) つまり、(7)を純粹に語用論的な定義に読み、 *déictique* と *anaphorique* の差は、使用される状況の違いであるとみなせば、ということである。このようにとらえられた *anaphore* は ② の広義 *anaphore* と一致する。

6) この種の *il* の先行詞をめぐる議論については、TASMOWSKI-DE RYCK et VERLUYTEN (1982), KLEIBER (1990) を参照。

7) 井元(1989), 井元(印刷中)参照。

[参考文献]

- CORBLIN, F. (1983): «Défini et démonstratif dans la reprise immédiate», *Le français moderne* 51, pp. 118-134.
- DUBOIS, J. et al. (1973): *Dictionnaire de linguistique*, Larousse.
- KESIK, M. (1989): *La cataphore*, PUF.
- KLEIBER, G. (1990): «Quand IL n'a pas d'antécédent», *Langage* 97, pp. 24-50.
- (1992): «Anaphore-deixis: deux approches concurrentes», *La deixis / colloque en Sorbonne (8-9 juin 1990)*, PUF, pp. 613-623.
- MAILLARD, M. (1974): «Essai de typologie des substituts diaphoriques», *Langue française*, 21, pp. 55-71.
- TASMOWSKI-DE RYCK, L. & VERLUYTEN, S. P. (1982): «Linguistic control of pronouns», *Journal of semantics*, vol. 1, No 4, pp. 323-346.
- ZRIBI-HERTZ, A. (1992): «De la deixis à l'anaphore», *La deixis / colloque en Sorbonne (8-9 juin 1990)*, PUF, pp. 603-612.
- 井元秀剛(1989): 「le N と ce N による忠実照応」, 『フランス語学研究』23号.
- (1991): 「人称代名詞 IL の指示対象——おもに CE との対比において」, 『仏語仏文学研究』7号, 東京大学仏語仏文学研究会.
- (印刷中): 「日本語とフランス語の *deixis* (指示語)」, 『仏語仏文学研究』9号, 1993年.